

「隣人を自分のように」

川口有美子著「逝かない身体—ALS 的日常を生きる」という本を読んだ。ALS の Yさんと知り合
って、月に一度の面会を8年以上続けながら、いまだに心の繋がりも持てず、いつも愚痴をこぼし、
もうほとんど諦めかけている私に「これ読んでみたら」と、娘が持って帰ってくれたのだ。読み終え
てから、再びぱらぱらページをめくると、とても読めないというか、安穩な私などが読んではいけ
ないような、想像を絶する過酷な内容なのに、一行一行丁寧に読んでいる間は、その過酷さより、
人間の繋がり可能性というか、人が生きるという日常そのものを感じながら、それこそ引き込ま
れるように一気に読んでしまった。ALS(筋萎縮性側索硬化症)発症から約4年で TLS(トータリィ
ロックイン・ステイト=完全な閉じこめ状態)に。それからは眼球も動かず、一切の意思表示もでき
ないので、発汗や顔色から何かを読み取りながら過ごした8年の日々、その母を自宅で介護し続
けた川口有美子さんの記録である。このような重い内容をどれほど読みとれたかは心もとないが、
「…家族の悪戦苦闘を描いた物語として読んでいただければ幸いです」という「あとがき」の一節
に慰められ、今月はこの本から教えられたことを書こうと思う。

読み終えてまず思ったのは、そうか、「隣人を自分のように愛する」とはこういうことだったのかと、
感じたこと。

先日、マルコ福音書 12 章 28～34「最も重要な掟」を学んだ。イエス様の言われた第一の掟「わ
たしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、
あなたの神である主を愛しなさい」は、何も問わなくても、とうてい出来なくても、「そうか、そうだ、
確かにそうです」と深く納得できる。しかし、「隣人を自分のように愛しなさい」という第二の掟には、
「自分のように愛するってどういうふうにと、考え込んでしまう。それが、「自分を愛するよう
に」とは「無条件に愛すること」なのだと、今回の学びで聞いてよくわかったような気がした。でも、や
はり具体的にはよく分からなかった。それが、この本を読みながら、一人の TLS 患者と関わる多く
の人たち、ことに「患者を一方的に哀れむのをやめて、ただ一緒にいるられることを尊び、その
魂の器である身体を温室に見立てて、蘭の花を育てるように大事に守ればよいのである」という
有美子さんの言葉に、隣人への無条件な愛を実感する思いがしたのである。

もちろん、一朝一夕にそのような美しい思いが生まれたのではない。母の思いや願いを尊重し、母が最後まで母らしく生きられるように全力で支えようとしても、眼球さえ動かさず文字盤も使えなくなると、母が死にたがっているなら殺してあげようと考えってしまう。そんな極限の苦悩の中で、「いっぱいお世話かけてごめんね でもうれしかった ありがとう」という母の遺書を読んでしまい、ならば、どんな状態になっても否定的になったり、自分を責めて余計に悲しんだりしないで、母の身体を生かし、面倒をみることに専念すればいいと思えたのだ。それが、「ただ一緒にいられることを尊び、蘭の花を大切に育てるように大事に守ればよい」という表現となったのだと思う。

隣人を愛するとは厳しいことだと思う。自分のことなら、お腹がすいたら食べて、疲れたら横になるという当たり前のことも、それが隣人のこととなるとほとんど気づかない。愛するには「想像力」と「注意深さ」が必要だというのが、とにかくこの本を読んで、周囲の愛がなければ一時も生きることのできない人を8年もの間生かし続けた、文字通り「自分を愛するような隣人への愛」を感じたのだ。いったい私は、そのような思いで人を愛したことがあっただろうか、と。

わたしのそばにいる魂が 傷つき悩んでいるのに
もしそれを読み取るだけの思いやりがわたしになくて
無関心のままでいるならば
その時わたしは カルバリの愛をまったく知らない

もし多大の努力が要求されるという それだけの理由で
他人の最善を考え 努力することをためらうならば
その時わたしは カルバリの愛をまったく知らない

エミー・カーマイケル

この本を読みながら、Yさんのことを少しはよく理解できた思いがする。単にYさんの性格だと思っていたのが、ALS 特有の気難しさであったり、そのせっぱつまった状況では、人は自分の罪や赦しについて考えるより、今日を生きるための助けを求めてしまうのだということも。有美子さんが、人との対話ができなくなった母も「神様とならいつまでも対話できるかもしれない」と思って、信頼できる人にキリスト教の話をしてもらっても、肝心な罪の話になると母は受け入れなかったという。

私も、人に分かってもらえなく辛い思いをしている Y さんに何より必要なのは祈りであり、イエス様との対話だと思ったから、どうしても神様の愛を伝えたかった。でも、彼女ははっきりと言った。正確には、頬に当てたセンサーで、アイウエオ表から一字一字選びながら「わたしは かみのあいより ひとのあいを しんじる」と書いた。

だが、Y さんがどんなに神様を拒もうと、Y さんが私の隣人であることに変わりはない。イエス様は、「神を信じる人を愛しなさい」と言われたのではなく、「隣人を愛しなさい」と言われたのである。隣人を愛するとは、何と深遠な、何と尊い戒めだろうと気が遠くなる思いがする。

何の意思表示も出来なくなって、それでも呼吸器をつけて生き続けることがどういうことなのか、私には何も分からない。ただ、安息日に病人を癒すことを許さなかった人たちに対して、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」と問いかけられたイエス様の言葉だけが思われる。善とは命を救うこと、悪とは殺すこと、これは私の思いなどではなく、神の言葉なのだ。この世に、その存在を否定されて良い人など一人もいない。隣人を愛するとは、まずその人の存在を肯定することなのだ。そして、私たちが与えられた隣人一人一人を大切に歩むなら、「何事もそうでしょうが、当事者は運命には逆らえません。ただ運命の好転を信じて助けを求めれば、前方に視界が開けていきました」という有美子さんの言葉は、きっと私たちの現実になるだろうと、表紙の真っ赤な夕焼け空が語っているようだった。